

1. 序論

2. 1991年独立後に権益を新たに獲得してきた国際石油資本

- 1) 日本
- 2) アメリカ
- 3) ロシア
- 4) イギリス
- 5) フランス
- 6) イタリア
- 7) その他

3. 独立後のアゼルバイジャン共和国の石油政策

- 1) カスピ海南部油田
- 2) アゼルバイジャン国営石油会社のとる基本政策と沿岸の諸国
- 3) グルジアとの関係
- 4) トゥルクメニスタンとの資源争奪戦
- 5) チルレル政権以後のトルコ共和国の接近と、それに対するアゼルバイジャン側のリアクション

4. 原油の市場への供給ルートは今後いかに確立されていくのか

- 1) 両輸送ルートに関しての検証
- 2) ロシア側の変化

5. 合衆国がメジャーと一貫してとってきたエネルギー政策

- 1) 序説
- 2) 戦後から第一次、第二次オイルショックまで
- 3) 1980年から湾岸戦争まで
- 4) ソ連崩壊以降
- 5) 終節

6. チェチェン紛争が3ルートにおよぼした影響

- 1) 近年のロシアの影響の低下を招いたこの紛争と3ルートとの関係

7. 結論 - 3ルートの今後の展望

参考文献

---